

艦橋に残っていた 東郷平八郎の足跡



明治三十八年（一九〇五）五月二十七日、ロシアのバルチック艦隊との決戦のとき。東郷平八郎は、左手に東宮殿下（のちの大正天皇）から賜った名刀「一文字士房」を、右手に双眼鏡を握り、旗艦「三笠」の最上艦橋に立ちました。

参謀の加藤友三郎や秋山真之は、装甲に覆われた司令塔の中へ入るよう懇願しますが、東郷はこれを拒否。吹きさらしの艦橋に留まる姿は、兵たちの士気を鼓舞しました。

実はこの判断の裏には、計算があつたといわれています。敵艦との距離が六千五百メートル前後であれば、練度の高い日本側は砲弾を当てることができるが、ロシア側はほとんど当てられない……。

いざ戦いが始まると、連合艦隊の先頭を行く「三笠」は集中砲火を受け、最上艦橋にも水しぶきがかかるほど、周囲には無数の水柱が立ちます。それでも東郷は、顔色一つ変えず、決して動こうとはしませんでした。なぜ東郷は、ここに立ち続けることができたのか。その理由は、彼の生涯を振り返ると見えてきます。

ときを遡ること四十二年。東郷は薩英戦争において十六歳で初陣を果たし、鳥羽伏見の戦いにも参戦しました。

明治元年（一八六八）、薩摩藩の春日丸に三等士官（少尉相当）として乗り組んだときには、阿波沖で旧幕府軍の開陽丸との海戦も経験しています。このとき春日丸は三十六発の砲弾を放ち、直撃はゼロ。三弾が相手にわずかな傷を与えただけでした。一方の開陽丸は、二十六門の砲で応戦しましたが、こちらも命中弾はゼロ。東郷は、艦砲はなかなか当たらないと身をもって学んだのです。

こうした十代からの実戦経験があつたからこそ、日本海海戦でも泰然自若としていられたのでしよう。

戦いを終えて、東郷が最上艦橋を離れるとき、彼の立っていた足跡だけが濡れておらず、くつきりと残っていたといわれています。



記念艦「三笠」の最上艦橋。
東郷の立ち位置が分かる

三笠だより

「皇国ノ興廃此ノ一戦ニ在リ、各員一層奮励努力セシメ」
Z旗を掲揚した直後の情景を描いた
「三笠艦橋の図」をご紹介します。

「三笠艦橋の図」

対馬沖にバルチック艦隊の艦影を認めた連合艦隊は、午後一時五十分、Z旗（「国の命運を懸けたこの戦いに全力を尽くせ」）を意味する信号旗をマストに掲げ、敵艦隊に近づき始めます。

そのときの三笠艦橋の様を描いたのが、この東城鉦太郎による絵です。

皇太子殿下から拝領した名刀を帯び、高倍率双眼鏡を右手に持つ東郷平八郎司令長官を中央に、向かって左に参謀長の加藤友三郎少将、右に参謀の秋山真之中佐の姿が描かれています。

記念艦「三笠」の上甲板には、この絵をパネルにしたものがあり、無料で記念撮影ができます。また、原画は中央展示室にて見ることが出来ます。



今月のおすすめ商品

東城鉦太郎が描いた「三笠艦橋の図」が
扇子になりました。

14,400円（税込）。



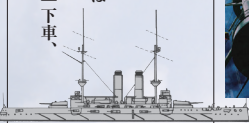
今月の読者特典

『歴史街道』二〇一九年五月号を
三笠受付で見せると、先着
10名様にクリアファイル
二枚セットをプレゼント！



記念艦 三笠

観覧料金
大人 600円
65歳以上 500円
高校生 300円
小中学生 無料
京急横須賀中央駅もしくは
JR横須賀駅より
三笠循環バスで「三笠公園」下車、
徒歩1分



TEL : 046 (822) 5225
http://www.kinenkan-mikasa.or.jp/
神奈川県横須賀市稲岡町 82-19